

【書評】

マリア・ノリエガ・ラクウォル著
『キッチンからカーネギー・ホールへ
——エセル・スタークとモントリオール女性交響楽団』
藤村奈緒美訳、ヤマハミュージックエンターテイメント
ホールディングスミュージックメディア部、2022年

Maria Noriega Rachwal,
*From Kitchen to Carnegie Hall: Ethel Stark and the Montreal
Women's Symphony Orchestra*, Second Story Press, 2015

矢内琴江
YAUCHI Kotoe

初の女性常任指揮者の就任、女性交響楽団の誕生など、近年日本のクラシック音楽界における「女性活躍」が目覚ましい。音楽業界のジェンダー・ギャップを論じた安積（2023、pp.151-154）にしたがって、いくつか数字をみてみよう。日本の音楽系大学の卒業者は、女性が約9割を占めている。それにもかかわらず、女性たちにとって音楽業界は狭き門だ。現在、プロのオーケストラ楽員として活動している女性は4割程度なのである。ジェンダー・ギャップは楽員の構成にのみ見られるのではない。例えば、38オーケストラ団体のうち、ヴァイオリンなどの弦楽器、フルート、オーボエなどの木管楽器は6～7割前後を女性が占めている。ハープ奏者は女性が10割である。それに対して、チェロやコントラバスなどの弦楽器や金管楽器のほとんどが男性奏者である。また表現の現場調査団によれば、女性指揮者の割合は約3%である¹。これが日本のクラシック音楽界の現状である。

さて、本書の主人公である「モントリオール女性交響楽団 (Montreal Women's Symphony Orchestra: 以下、MWSO)」が誕生したのは1940年1月。20世紀前半のケベック州では、2つの戦争に徴兵された男性たちに代わって多くの女性が労働市場に進出した。また20世紀初頭から女性参政権運動が行われており、連邦政府レベルでは1918年、ケベック州では1940年に、女性たちが投票権を獲得した。MWSOは、このように女性たちが市民権獲得に向けて大きく歴史を動かした中で誕生したのだ。

MWSOの指揮者であるエセル・スタークが生まれたのは、こうした時代の幕開けである1910年8月25日だった。モンリオール市のサン・ローラン通りに住むユダヤ人家族の3人の子どもの長女として誕生した。

そしてこのモンリオール市で、エセル・スタークとマジック・ボウエンという2人の女性が力を合わせ、他の女性たちとともに、人種、宗教、階層の違いを超えて、音楽を通して「誰もがみな平等」(p.230)になるMWSOを作ったのである。本書は、この女性だけのオーケストラが奏でたシンフォニーを蘇らせている。

著者のマリア・ノリエガ・ラクウォル (Maria Noriega Rachwal) はオンタリオ州トロント在住の音楽教師であり音楽学者である。本書は、著者が長年にわたるインタビューなどの詳細な調査を重ねて発表したものである。それによって、歴史的記録がほとんどなかったMWSOの「断片を少しずつつなぎ合わせ、組織としてのMWSOの姿」(p.276)を描き出した。以下に本書の目次を示す。

- プロローグ 平等を求める闘い
- 第1章 マエストラの生い立ち
- 第2章 女性の魅力が輝く
- 第3章 方向転換
- 第4章 抑えがたい力と動かしがたいものとの出会い
- 第5章 景気づけ
- 第6章 クレッシェンド
- 第7章 一番乗りの凱旋
- 第8章 発展に伴う痛み
- 第9章 デクレッシェンド
- 第10章 カーテンコール
- 第11章 受け継がれていくもの

「組織としてのMWSO」を叙述するにあたり、著者はまず、MWSOが誕生した20世紀初頭の音楽界をジェンダーの視点から記述することから始める。オーケストラが「女人禁制の『男性限定クラブ』」(p.9)だったことは言うまでもないだろう。確かに、女性が音楽を習うことはたしなみとして奨励されていたが、演奏できるのは家族などの内輪の集まりだけで、男性

の才能を脅かすほど上達することは許されなかった。要するに女性には二重規範が課されていたのだ。また女性が演奏することを許されている楽器も決まっていた。例えば鍵盤楽器、そしてハープ、リュート、ギターといった弦楽器だ。座って演奏する姿が女性らしいと見なされたからだ。脚を広げて演奏するチェロやコントラバスははしたないとされており、木管楽器、金管楽器、打楽器も女性に相応しくない楽器とされていた。そして女性が指揮者となることなどはもつての外だった。それは音楽界の男性優位の構造を崩壊させることにつながるからだった。したがって、20世紀前半、女性たちが音楽で生きていこうとする時にはいくつもの壁があった。そして、この壁を打ち破った、いく人もの先人の中にエセル・スタークとマジ・ボウエンもいるのだ。

エセルのキャリアは、ヴァイオリニストとしてスタートする。彼女はいくつもの「初の」を成し遂げた人物だった。カナダ人女性として初めてアメリカのカーティス音楽院に入学。カーティス音楽院で指揮法の講義を受講した初の女性。カーティス音楽院を卒業後は、ソリストとして演奏をしていた。当時のアメリカでは、女性演奏家がプロの演奏家として報酬を得ることは難しかった。そのため、女性が演奏する機会を設けるために、「女性のオーケストラ」がいくつか結成された。しかし、それらは本格的な演奏は求められなかったり、メディアの批判に晒され長くは続かなかつたりした。こうした音楽界の中で、エセルは女性音楽家だけで構成された、大衆向けのオーケストラの楽団員としての仕事を得ることに成功する。しかし、さらなる挑戦のため楽団を辞めたエセルは、友人と2人でニューヨーク女性室内管弦楽団を結成し、指揮者として活動を始めた。さらに1938年春、アメリカ音楽家連盟に所属する150人以上の女性メンバーによる業界の女性差別に対する抗議活動が行われ、エセルもそれを経験した。このようにエセルは、楽団を組織すること、差別と闘うことを学んでいったのだ。しかし間も無く、アメリカは第二次世界大戦の不穏な空気に包まれ始め、エセル自身もまた戦争の悲惨さと無関係では居られなかった。

MWSO のもう1人の創設者であるマジ・ボウエンは、モンリオールの上流階級の女性だった。彼女は当時富裕層の女性の多くがそうであったように、女性団体を支援したり、教会での慈善活動にも熱心に取り組んだりした。また多くの女性音楽家とも親交があった。彼女自身も、友人たちと弦楽四重奏のグループを作っていた。そのことが、彼女に戦時下で人びとの心の慰め

になることをしたい、女の人たちに役立つことをしたいという思いを芽生えさせ、「ほかの女性たちと一緒に音楽を奏でられる場所、『自分たちだけの部屋』をつくる」(p. 70) という夢を生んだ。マジジの頭には、この夢を叶えるためのリーダーとして、エセル・スタークの名が閃いたのだった。当時、エセルはモンリオールに戻り、ソリストとして活動していた。

2人の出会いは瞬く間に化学反応を起こし、この夢はもっと壮大な計画に変わった。2人は女性だけで構成されたフル編成のオーケストラ——モンリオール女性交響楽団の結成を目指す。しかし当時、弦楽器ならまだしも、木管楽器や金管楽器を吹く女性などいなかった。そこで2人は「音楽を演奏したいと思っている女の人をすべて受け入れる」(p. 79) ことにした。階級、人種、言語などによる社会の分断を超えて、あらゆる女性が参加できるオーケストラだ。エセルとマジジはすぐさま行動を起こし、わずか10日間で40人のごく普通の市民である女性たちと楽器を集めた。楽器は中古で修理の必要すらあるものだった。最初は練習場所もなく、メンバーの自宅に集まった。それでも十分にオーケストラはできるのだ。みんなが楽器を演奏できたわけではなかったので、エセルが教えた。メンバーは楽器の練習だけをできる生活ではなく、子どもの世話や仕事をしながらの練習だった。しかし彼女たちは歴史を創り始めていた——「自分たちは音楽における女性運動を始めたのだ。自分たちは交響楽団の女性参政権論者なのだ」(p. 108)。

最初のコンサートは楽団結成から7ヶ月後の1940年7月31日の夜、モン・ロワイヤルの丘の上だった。5,000人の人々がこの日MWSOの音楽に拍手喝采を贈った。その後、MWSOはさまざまな出来事を経験しながらも成長を遂げる。そして結成から7年後である1947年10月22日、MWSOの80人以上の女性たちは、ニューヨークのカーネギー・ホールで演奏した(しかも大成功の)、カナダで初めてのオーケストラとなった。素晴らしい音楽に性別など関係ないことを証明したのである。それからしばらくMWSOは絶頂期を経験するが、次第に内的・外的な諸要因によって、組織の維持が困難になっていく。最も大きな打撃は公的な財政支援を受けられなかったことだ。彼女たちが証明した音楽の素晴らしさが、男性優位の構造にとって脅威となったからだった。1965年10月25日のコンサートがMWSOの最後の演奏となった。

MWSOは「女性だけの」オーケストラだった。しかし、母親、主婦、学生、労働者、教師、事務員などのフランコフォンにアングロフォン、ユダヤ教徒にキリスト教徒、白人に黒人といった16歳から60歳までの実に多様な

女性たちの集まりだった。そして、階層も、宗教も、人種も異なる女性たちを結びつけていたのは、音楽を奏でたいという情熱だった。MWSO が私たちに残したものは何か。女性に対して社会が今よりもっと抑圧的だった時代に、女性たちはやってのけたということだろうか。あるいは、女性は男性以上に活躍できる、ということだろうか。本書が伝える MWSO の姿からは、もっと豊かなことを学ぶことができるだろうと考える。MWSO は、性差別、人種差別、階級差別などさまざまな差別によって奪われてきた自信を取り戻させる場になっていた。

性別にかんする固定観念を打ち破って女性に演奏する機会を与えるという点で、MWSO は間違いなく成功を収めていた。また、もっと重要な点でも成功していた。女性たちに自信を持たせ、その自信が人生のほかの局面でも生かされるようにしたことだ。このように自分の力を信じる心は、演奏するときに舞台上で効果を表しただけでなく、舞台の外でも、何らかの偏見や性差別や不平等に出くわしたときにはいつでも力を発揮した。(p.220)

この自信は音楽を通してはもちろん、楽団員どうし困難を乗り越えるために助け合い、寄り添い合う中で育まれていったことを本書からは読み取ることができる。仲間と共に音楽を奏でる楽しさを知ることで、仲間の苦しみや悲哀に寄り添い、分かち合うことも知っていったのである。MWSO が、女性たちが差別によって奪われてきた自己を信じる力と同時に他者を信じる力も取り戻す人格形成の場になっていたと考えることができる。

最後に、本書の特筆すべき点として、MWSO を構成していた女性たちを「多様性」という一言で十把一絡げにまとめずに、固有の物語を持った1人ひとりとして描いている点について触れたい。クラリネット奏者であるヴァイオレット・ルイズ・グラントの例を挙げる。彼女はカナダの黒人として初めて交響楽団の正規団員として演奏した人物である。本書は、ヴァイオレットがモンリオールで生きる中で経験してきた、黒人女性であるという理由による人種差別と性差別についても目を背けることなく記述している。その彼女がMWSOに出会うまでどのような人生を歩み、いかにしてMWSOと出会い、そしてそこで活動し、またMWSO解散後、どのような道を歩んだのかを丁寧に描写している。女性だけの交響楽団の物語を描いた本書そのものが、

あたかも 1 つの交響曲のようである。

(やうち ことえ 長崎大学)

注

- 1 表現の現場調査団 (2022) 『ジェンダーバランス白書 2022』 <https://drive.google.com/file/d/1Fsb69-VQAAYypKMjRII4PF1DHDQkNbk/view> (最終閲覧日: 2024 年 5 月 5 日)

参考文献

- 安積京子 (2023) 「日本の音楽業界におけるジェンダー・ギャップの実態と展望—日独のオーケストラのジェンダー比較を通して—」『愛媛大学教育学部紀要』、第 70 巻、151 ~ 166 頁。